

聖ルカによる福音書第12章13節-21節

於:聖パウロ教会

司祭 山口千寿

今日から3回の主日は、ルカ福音書の12章を読むことになっています。この箇所は、イエスさまがガリラヤからエルサレムに向かって旅をしている途中で、弟子たちに対して語られた教えが記されています。

今日の教えは、新共同訳聖書では「『愚かな金持ち』のたとえ」という小見出しが付いていますが、たとえ自体は、後半の16節から20節までです。イエスさまが、このたとえを話すことになったきっかけは、群衆の中の一人の男が、遺産の分配について調停をしてくれるようにと、イエスさまにお願いしたことでした。それに端を発して、人間の命というのは財産のあるなしには何の関わりのないことだと、イエスさまは教えられました。親の残してくれた遺産をどのように分配するかという問題は、現代でも大変大きな問題です。遺産を巡って子供たちが争い合うという、醜い出来事が世の中には頻繁に起こります。それが他人事であるあいだは、愚かなことだと冷笑していられますが、いざ、自分に同じことが起これば、欲の皮がつっぱってくるのを、いかんともしがたいのが人間の現実です。同じ親の血を引いた兄弟同士が仲良くしていくことを大事にするよりも、自分にどれだけの遺産がもらえるのか、その方がずーっと大きな関心事になっていくのです。

わたしの身近で実際にあった話ですが、ある方が親から引き継いだ土地を自分の名義にして、そこに住んでいました。それが、ずっと後になってから、いろいろな事情があってそこを処分して、地方へ引っ越すことになりました。それを聞きつけて、その方の弟が、処分した土地の代金の一部を分けろと押しかけてきました。たまたま、その時、その方は体調が悪くて、手術を受けなければならないような状態でしたが、そんなことにはお構いなしに、その弟は具合の悪い兄さんに、何とかしてウンと言わせようとして、連日枕元で大声を上げて強要しました。

その方は、その後も、新しい家ができるまで、知り合いの家に間借りをしていましたが、弟はそこにもやって来て、近所迷惑になるようなやり方で、金をよこせと何度も喚いていきました。熱心な信徒の家族の間で起きたことです。お金に目がくらむと、人間は何をしでかすか分かりません。わたしたちは、自分だけはそんなことはない、大丈夫だと、自信を持って言えるならば幸いです。

皆さんの中にも、財産を持っておられる方がありますが、特に土地や家屋のある方は、それをどのように残すのか、きちんと遺言書にしておかないと、後で思いがけない争いの種になりかねません。ウチの子たちに限ってそんなことにはなるまいと思っても、いざ相続が発生しますと、人間の際限ない貪欲は、人間が生きていく上で何が大事なことであるかということに、目をふさいで見えなくさせてしまうのです。

今日の福音書にも、「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい」と勧められています。節度のない富への欲求、より多くを持つとうとする所有への果てしない欲望、

それが貪欲です。

今日の使徒書は、コロサイの信徒への手紙の3章12節からを読みましたが、その前の5節からを読んでも良いことになっています。この5節には、「地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない」と記されています。「みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、貪欲」と5つの悪徳が上げられて、その中でも特に貪欲は偶像礼拝だとされています。貪欲であることは、悪霊の前に跪くことに他ならないと言うのです。悪霊に支配されて、神さまの代わりに自分自身や神ならぬものを神の位置に置くことだと、貪欲であることの罪がどのようなものであるか指摘しています。その貪欲を「捨て去りなさい」と勧めているのですが、この「捨て去りなさい」という言葉は、貪欲を「殺しなさい」という大変強い言葉です。貪欲を殺して、その力が2度と現れることのないようにしなさい。貪欲のもとに置かれることのないようにしなさい、という勧めです。

エフェソの信徒への手紙の中でも、貪欲に対して、他の悪徳と共に厳しく戒める言葉が書かれています。「次の事をしっかり覚えていなさい。心の中で、または生活の中で性的非行また汚れをいつも行っている者、あるいは貪欲な者(すなわち、他の人々の財産に対してむさぼりの欲求を持ち、また、利益をむさぼり望む者)、これは[実質的には]偶像礼拝者ですが、そのような者は、だれも、キリストと神のみ国において、なんの相続財産も受けません。」(5:5、『詳訳聖書』)と記されています。遺産に目がくらんで貪欲の虜になったら、神の国を継ぐことが出来なくなるという警告です。

今日のイエスさまのたとえに出てくる金持ちの農夫ですが、この人はきっと勤勉に働いて、その結果、金持ちになったのでしょう。農業は、今でも天候によって収穫に影響が出てきます。豊作の年もあれば、そうではない凶作の年もあるでしょう。しかし、このたとえの農夫は、どんな年にも一生懸命働いて来たのでしょう。真面目に働き続けた結果が、豊かな収穫に結びついてきたのでしょう。

豊作の年に、倉に入りきれないほどの作物が穫れて、今までの倉を壊して建て替え、穀物や財産を全部その中にしまい込んで、自分自身に向かって、「さあ、これから何年も生きていけるだけの蓄えができたぞ。一休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と言ってやったというのです。沢山の収穫は自分の勤労の実りです。その実りをもって、自分の豊かな生活を保障したのです。満足のいく生活が待っています。充実した喜びのある生活をこれから楽しむのです。その喜びを自分自身に向かって語ったのです。

しかし、このたとえでは、この金持ちの農夫のことを、神さまは「愚か者よ」と呼んだというのです。「愚か者」というのは、頭の悪い人という意味ではありません。この人は、決して頭は悪くはありませんでした。自分の人生の将来に向けて、しっかりと計算もできるし、得られた収穫を浪費したり、放蕩に身を持ち崩すようなこともありません。宵越しの金を持たないのが粹な生き方だなどとうそぶいたりしないのです。堅実にため込んで、将来に備えるという計画性のある人です。

だけれども、この人のことを神さまは、「愚か者」と呼ぶのです。聖書のいう「愚か者」というのは、神さまのことを知らない者のことです。詩編には「愚かな者は心の

うちに『神はない』と言う」(14:1、聖書協会訳)と歌われています。神さまのことが、心の中にも頭の片隅にもない人が、「愚か者」です。

この農夫は、豊作を得て「どうしようか」と考えを巡らし始めたときに、次のように言っています。英語の聖書(NRSV)からの直訳です。「わたしはどうすべきだろうか。何故なら、わたしは、わたしの農作物をしまっておく場所がない。それから彼はこう言った。わたしはこうしよう。わたしはわたしの収納小屋を取り壊し、大きい小屋を建てよう。そして、わたしはわたしの穀物とわたしの財産をそこに蓄えよう。そしてわたしはわたしの魂に言おう。」

この金持ちの言った言葉は、全部、「わたし」が主語となっています。そして、所有格も全部、「わたしの」です。「わたし」以外は、この農夫の頭にはないのです。神さまは、この金持ちに対して、「お前の命は今夜にも取り上げられる」と言われました。「[神のみ使いたちが]おまえの魂をおまえから求めに来る」(『詳訳聖書』)と言うのです。神さまが、お前の命を返しなさいと要求されるということです。

わたしたちの命、それはだれ一人、自分の力で獲得したものではありません。与えられたもの、一時、わたしたちに預けられているものなのです。人が死んだら、自分の持っている財産は、その人の手を離れて他の人のもとに行ってしまいますが、わたしたちの命も、神さまのみ手の中にお返しをするのです。

人の持ち物や財産が、命を左右したり、成り立たせているかのような思い違いに捕らわれて、必要とする分を越えて、多くのものを所有する誘惑から解放されることを、イエスさまは求めておられるのです。

この金持ちは、収穫を自分の力によって得られたものとし、それを自分の人生のためにしか使おうとしませんでした。金持ちの関心の先には、自分がどのように楽しんで暮らすか、ということしかなかったのです。そのような生き方に対して、「神の前に豊かになる」ことを、イエスさまは求められます。

「わたし」「わたし」と言って、自分だけしか出てこないような生き方を改めることです。「わたし」の代わりに、神さまや隣人が、わたしの中に大きくなっていくような生き方です。それが喜びとなるような生き方です。そのような生き方の上に、神さまの祝福は豊かに注がれるのです。

今日のイエスさまの教えは、わたしたち一人一人に向けられたものだけに留まらず、教会のいのちについても、どのようにあらねばならないかを教えているのではないのでしょうか。キリストの身体である教会は、どこまでもイエスさまに従い続けるときに、そのいのちを生きることになるのです。カンタベリー大主教であったラムゼイ主教の言葉を、もう一度、心に留めたいと思います。「おのれのためにだけ生きる教会はおのずから死に絶える。」常に銘記すべきであります。

貪欲を捨てて、神の国を受け継ぐものとなるよう、わたしたちの日常の生活の在り方、そして教会の姿を改めて振り返りたいと思います。